

シリーズ

新・漁業人

親族ならではのフラットな社風
若手が活躍し協業経営を実現

エテルナ・ワコー株式会社 漁労長

溝口 琢磨 さん

溝口 隆次 さん



社名の「エテルナ」はラテン語で「永遠」、ワコーは「和」と「光」を意味する。「永遠に仲良く手を取り合い、和をもって頑張って行こう」「積極的に新しい挑戦をして行こう」との思いから名付けられた。右から専務の溝口雄樹さん、溝口隆次さんと溝口琢磨さん、常務の溝口知幸さん。全員がいとこ同士(右上) 港に水揚げされるマサバ(左上) 大中型まき網漁船。豊かな漁場が広がる(左下)



所在地 ● 長崎県佐世保市

設立 ● 1990年

経営内容 ● 大中型・中型まき網漁業、養殖、
水産加工、料理店経営、活魚販売

従業員 ● 150人

URL ● <https://eteruna-wakou.jp/>

協業経営の先駆け

気候変動により、今まで多かった魚が減ったり、少なかった魚が増えたり、魚の分布が北上するなどしている。政府は、どの魚が豊富にいるのかをできる限りリアルタイムで分析して漁獲量を適宜セーブしつつも、漁業経営者らが協業するなどで複数の生産方法を持てるようにし、その時に豊富な魚をうまく活用できるよう支援していく方針だ。

協業で複数の生産方法を持つ、先駆事例の一つが、エテルナ・ワコー株式会社(長崎県佐世保市)。1990年、魚価安や漁業者同士の漁場争い、債務などで苦しんだ同市大潟町大崎地区の漁業者らが合併して誕生した。サバ・イワシ・アジなどを獲るまき網漁業を軸としつつ、養殖、水産加工、料理店を営む業態に。合併により漁業者同士で協力して漁場を探索できる、債務の返済計画を金融機関と交渉できるなど、経営は安定していった。

統率など、豊富な経験を求められる漁労長としては若さが際立つ。

風通しのよさと切磋琢磨

同社は地域のリーダー的存在だった溝口家のメンバーを中心に成る。専務で総漁労長の溝口雄樹さん(以下専務)、常務で漁労長の溝口知幸さん(以下常務)、同じく若手の溝口琢磨さんと隆次さんは全員がいとこ同士。それぞれ家屋も距離が近く、常務は「幼少時から兄弟のように付き合ってきた関係」と笑顔を見せる。

近年は血縁者以外からの採用も増えているが、日々の業務終了後には、社員が集まっでの対話を欠かさない。

社内には生ビールサーバーやハイボール用の炭酸水メーカーまで備えるなど、「飲みニケーション」の準備が万端だ。そうした場が「業務について会議したり話し合う機会にもなる」と琢磨さん。専務も「昔から一緒に遊んできた先輩や後輩として、友達のように話してくれる」と口を揃える。業務に関する意見は、役職にかかわらず忌憚なく交換できる空気だという。

実際、われわれの取材中も、社員らは笑顔にあふれ、ユーモアを交

えつつ、しかし仕事のことに関しては真剣に、各々の意見をよどみなく語る。集合写真の撮影など、社員が連携して動く場面では、無駄なく、テキパキと、かつ明るい表情で全員が動き、全く遅滞がない。本当に風通しとチームワークがよい。これは若い社員たちも働きやすいだろうな、と感じた。

そんな同社に隆次さんが就職したのは、高校卒業直後。2年後、20歳にしてまき網漁船団の一つで船長に就いた。異例ともいえるスピード出世は「自分から手を挙げた。お互いをよく知るライバルに負けたくなかった」。学生時代にサッカーで鍛えた、負けん気を発揮した。

だが新米船長時代の20代前半、「船長としての仕事を知らず、上の人からはキツく言われた。親が社内主導的な立場にいたので、七光り、と言われたのはしんどかった」。一方で「怒られても、分らないことは聞いたら答えてもらえ。環境に救われたとも振り返る。負けん気と悔しさをバネに、かつ、面倒見のよい周囲にも支えられ、頭角を現していった。今も、「集魚や漁獲の技術では、やっぱり負けたくない」と、心意気は健在だ。

同い年の琢磨さんは20歳の時、漁業の世界に飛び込んだ。高校卒業後2年間は自動車の整備士をしていたが、生活が安定していなかったという。「子どもができたことを機に、思い切って漁師になろう」と。親族経営であるだけでなく、会社自体が安定して稼げる環境であるという信頼があつてこそ、の決断だった。

「隆次さんと同じ年だが一歩遅れており、やはり苦労はあった。沖（漁場）でも怒られたものだ」と振り返る。とはいえ、こちらでもテニスや空手、ソフトボールなどに動しんできたスポーツマンであり、負けず嫌いを自認する。「一生懸命聞いたら先輩たちが教えてくれた」と、隆次さん同様にレベルアップしていった。

そして今も「皆で獲れるのが一番だが、親戚同士も多く、負けたくない。皆がライバル」。隆次さんとも意識し合っている。

ひとたび職場を離れ、お酒を注ぎ合つて談笑する隆次さんと琢磨さんの表情は柔和そのもの。本当に気の置けない仲なのだろう。競争意識を持ち合いながらも、正々堂々と技術やノウハウは伝え合えるという絶妙な社風。漁業者同士

の切磋琢磨が成長につながっているようだ。

環境変化に対応する経営

近年、太平洋系のさば類は、海水温の上昇、エサのプランクトンの不足によって魚体が成長しづらくなったり、繁殖力が下がったりしているのではと、国の研究機関である水産研究・教育機構は指摘する。資源の回復を促すために漁獲可能量(TAC)を減らすべきという研究結果も出たが、関係漁業者の合意には難航。近隣国を含めて、漁獲圧は高まっており、過剰漁獲と資源回復の遅れが危ぶまれる。

一方でエテルナ・ワコーの主力である対馬暖流系(日本海側)のマサバやマイワシの資源量は、全盛期には及ばないものの、2020年代に入って改善しているとみられる。同社も現状では、資源の総量が減ったというより「近場の瀬に魚が少ない」「働き出した当時と比べ、遠くの漁場に行く必要が出てくる。遠出のため、多めに氷が必要になる。移動に時間を取られ、漁獲物を積むための船が足りなくなる」。また、「漁場との往復に時間がかかって、操業が泊まりがけになり、従業員に無理をさせてしまう」



船上でいっそうイキイキとした表情を見せた琢磨さん(右)と隆次さん(左)。二人とも「好きな魚はアジ」。

といった課題意識が強い。

水温の上昇で漁獲した魚が弱ってしまい、船に積む前に鮮度が落ちて魚価が下がる問題も。さらに「魚種が変わった。イカやタイがない。イワシは増えたが魚体が小



若手も能力を発揮し、働きやすい環境が整う。遠洋に出れば数日間、船上で寝食をともにする仲だ(上) 取材中も立場隔てなく、和気あいい(下)

さく、鮮度持ちも価格もよくない
うえ、漁網に刺さって操業の支障
になることもあり、獲り控えるこ
とがある」また海の深さによって
海流の向きが違ってきていて、漁
網が破れるので困る」と二人は実
感を語る。

近年の長崎周辺では漁獲物を貯
蔵する冷蔵冷凍設備が足りないた
め、漁獲量が多い日に鮮度保持や
販売をしきれなくなる心配が高
まっている。

設備の増強を望む声は同社内
でも強い。設備の増強は巨額の投資
が必要で調整に時間がかかるが

「サバなどの資源と漁獲が減って
いる太平洋岸では冷凍庫や加工設
備が埋まっていけないと聞く。そこ
へ商材を運ぶ輸送網などの流れが
よくなれば……(琢磨さん)との意
見も。長崎などから太平洋岸へ漁
獲物を融通する案は全国まき網漁
業協会なども前向きに考えており、
今後の進展に期待がかかる。」

魚の多い漁場を探すに当たって
は近年、複数の漁船がタブレット
端末を用い、リアルタイムの魚群
探知機やソナー、航跡などのデー
タを共有できるサービスなどが普
及。データ通信費用がネックだが

「衛星通信費がもう少し安くなれ
ば導入しやすい」(隆次さん)。

環境変化に対応するため、同社
は自助努力にも積極的だ。隆次さ
んは、魚価を高めるため「冷凍品の
輸出や水産加工などが重要」とみ
る。世界の水産物需要が伸びる今、
輸出のチャンスは拡大中。さらに
社内では日持ちする干物などの加
工が可能で、市街地での販路拡大
などは実現できる期待も大きい。

柔軟に広い視野で次代へ

現時点では資源が豊富な同社の
漁場だが「獲れているうちに、陸の
仕事を考える必要がある」と琢磨
さん。隆次さんも「投資の可能性を
考えている」と続ける。加工品の増
強や販促に加え、漁獲物の仕分け
コストを下げるための選別台への
投資、スギをはじめ高水温に強い
魚種の養殖、自社活魚槽などを生
かした養殖魚の出荷タイミングの
調整・価値向上など、アイデアは
尽きない。

両氏ともまき網漁船の漁労長で
あると同時に取締役でもあり、社
内全体の事業を広い視野で展望す
る。「稼ぎ頭(まき網)」が好調なタ
イミングでも、そこに甘んじず冷
静に未来をにらむ姿勢は、水産に

限らず多くの企業の手本となるだ
ろう。

そんな両氏が強調するのは、世
代交代の重要性だ。陸上を含む幅
広い業務を視野に入れていくため
にも、若手を育てて「早めにまき網
漁船の現場を預け、世代交代の回
転率を上げていきたい」と琢磨さ
んは語る。若手には日々「助手とし
て漁場探索を任せたり、精神面の
フォローや技術を伝えたりしてい
る」と隆次さんも思いをつなぐ。

今も若手同士が話し合い、「あい
つには負けたくない」といったや
り甲斐を持つてくれているという。
気風は健在だ。近年は従業員の友
人など親族関係の外から就労して
くるケースが増えているが、社内
の士気は高く保たれていると胸を
張る。事実、社員の定着率も上々で、
2022年以降に就職した従業員
のうち95%が現在も就業している。
競争し合いながらも、隠さず本
音と技術は伝え合う。そんな風通
しのよさが、若手のやる気と能力
を高め、視野を広げて、未来を切り
拓いていく。そんな同社の好循環
に、これからも期待したい。

(株)みなと山口合同新聞社

太田 毅人／文

藤井 大介／撮影